

金鼎国後宮の華妃
追放仙女と呪われた皇子

シアノ Shiano



アルファポリス文庫

序章

月すらも凍えそうな夜のことだった。

少女が息を切らしながら、山道を駆けていた。

息が白く染まるほど冷え込むというのに、少女は穴の空いた夏用の薄物を羽織っただけで、ガリガリに痩せた手足が剥き出しになっている。

足を進めるたびに木の枝や鋭い笹藪の葉が、少女の剥き出しの腕や脛に切り傷を作っていく。

裸足の足の裏はもう痛みという感覚が遠くなるほどボロボロになり、地面に血の跡を残していた。

ずっと走り続け、喉が焼けるように痛い。

少女がわずかに走る速度を緩めると、途端に背後から怒号が飛んできた。

「いたぞ！」

「呪われた瞳の忌み子だ！ 殺せ！」

ヒュンツと矢がすぐそばを掠める音に少女は身を竦めた。また速度を上げて走り出す。

——どうして。

少女は何度もどうして、どうしてと、心の中で繰り返した。

——どうしてこんな目に遭わなきゃいけないの。

「逃がすな！ 山の獣を使つて反撃してくるぞ！」

「狼に村を襲わせる気だ！ その前に殺してしまえ！」

そんなこと、しないのに。

少女は誰かを傷付けたいと思つたことなど一度もない。

けれど、周囲の人間に嫌われてしまう。

「——お嬢さん、左の道にお逃げ」

木の上から優しい声が聞こえる。今のはおそらく山の梟だ。

梟の言葉信じ、少女は左の獣道に飛び込んだ。

「おや、獣操の娘かい。ならばこのまま真つ直ぐ行くといい。大丈夫。少し時間を稼いでやるからな」

その声は老いた牡鹿だ。しばらくして人間の怒号と弓を放つ音が響いた。

「獣を操る化け物め！ 早く殺せ！」

心が引き裂かれるように痛む。

——どうか無事でいて。

少女は牡鹿が稼いでくれた時間を無駄にしないために、足は止めない。

自分を殺そうとする追跡者から逃げ切るために、ただひたすら山の中を走った。

冷たい色の月の光を浴びながら、燐光のように青く光る瞳を涙で滲ませた。

一章

紺碧の空に、同じ色をした湖の水平線が溶け込んでいた。

見渡す限り、ひたすらに青い。

ここは仙郷という、仙人や仙女、その弟子だけが住まう特別な場所だった。

五年前、山の中で彷徨い続けていたところを、通りかかった仙女の弟子に救われた
 燐は、仙郷に連れてきてもらったのだ。

燐の住処は、仙郷内の端が見えないほど広大な湖にある小さな浮島だった。その日の修行を終えた燐は、柔らかい浮島にごろりと転がった。うらかな日差しが燐の体に降り注ぐ。

温かさが心地よくて、燐は唇を緩ませた。今日も、空を飛ぶ修行も水に浮く修行も、一度も成功しなかった。

正しく言えば、この五年間一度も成功したことがなく、未だなんの仙術も使えないけれど燐は悲観していなかった。

別に本物の仙女になりたいわけではない。

ただ、仙女見習いとしてここにいられるだけでよかったからだ。

仙郷は常に適温が保たれ、葦を積み重ねて作られた浮島は柔らかく、布団要らず。寒さに凍えることも、空腹で死にかけることもない。

「はあ、幸せだ……」

燐は、燐光のようにほの光る青い瞳に空を映した。

仙郷に辛いことは一つもない。

雨すら降らず、常に晴天で、強大な力を持つ仙人たちは、人間のように争うことはなく、異能を持つ燐のことも差別しない。

そもそも仙郷は広すぎて、特に用がなければ他の仙人と顔を合わせる機会もほとんどないのだ。

異能の力を持つ燐は、人里では恐れられたり、虐げられたりしてきたが、ここまでは安全で穏やかな日々を過ごせる。

強いて言えば、不満は食事が味気ないことと、少々退屈なことくらい。

だが、それくらい、これまでの地獄のような日々には比べればなんてことない。

燐にとって、この仙郷は全ての苦痛から遠ざけられた理想郷——そう思っていた。

「おーい、燐！」

そんな声とともに、白い鶴が青い空と青い湖面の境目を切り裂くように飛来し、音もなく葦の浮島に着地した。

燐は鶴に「天翼童子」と呼びかけ、手をヒラヒラと振る。

この天翼童子が燐の恩人であり、今は兄弟子だった。

なんでも、長く生きた鶴の妖なのだとか。

そして、この退屈な仙郷での貴重な話し相手だ。

「燐、今日の修行はどうだった？ そろそろ水に浮くくらいで来たんじゃない？」

「無理無理。水に浮くとか空を飛ぶとか、できるわけないって」

あつげらんかんとそう言った燐に、天翼童子はため息を吐き、翼を疎めた。
「まったく、もう少し真面目にやりなつて。それに髪もボサボサじゃないか。ちゃんとしたら可愛いのに」

「お世辞なんてやめて」

天翼童子の言葉に、燐は髪を押さえた。

燐の長い灰色の髪はとにかく毛量が多い。

寝癖もつきやすく、いつも緩やかにうねっている。

「ボサボサでも、誰も見ないでしょ」

「今、僕が見ているんだけどな。それともお尻を叩かれたいのかい？」

指摘された燐は唇を尖らせた。

「……今やるつてば」

燐は髪を手櫛で整えると、上部の髪だけを左右にくるくると巻き上げて、器用に団子状に纏める。

「ほら、これでいいでしょう。それより、今日はどんな話をしてくれるの？」

天翼童子は毎日燐に色んな話をしてくれるのだ。

星の読み方、病の見分け方、美しい所作や食事作法についてなど、話の内容は多岐

に渡っていた。天翼童子の話がこの仙郷での一番の楽しみだ。

「残念だけど、今日の話はないよ。これから仙女様がお会いになるそうだ」

「仙女様が……?」

燐は首を傾げた。

仙女様、と天翼童子が呼んだのは、天翼童子と燐の師匠であり、この仙郷の主のような立場にある最上位の仙女のことだった。あまりに高位なため、名前を呼ぶことすらはばかられるとして『仙女様』と呼ばれている。

燐どころか、仙郷にいる他の仙人たちも彼女の意向には逆らえない。

とにかく偉い方だということは燐もわかっていた。

「さあ、行くよ」

燐は天翼童子が差し出した脚に掴まる。

天翼童子はバサッと羽の音を立てて飛び立った。

細い脚に燐をぶら下げているとは思えないほど、軽やかに湖の上を滑空する。

飛ぶことしばし、天翼童子は巨大な蓮の葉の上にそっと燐を降ろした。

「仙女様、燐をお連れしました」

天翼童子がそう声をかけると、周囲に漂っていた霞が集い、人の形を作り上げて

いく。みるみるうちに妙齡の麗しい女性の姿になった。

「燐、よく来てくれましたね」

「仙女はつい聞き惚れてしまうような美しい声でそう言った。

「仙女様、私に何かご用ですか？」

燐が尋ねると、仙女は美しい顔を曇らせ、口を開いた。

「……ええ。燐、残念ですが、貴方には仙人の素質がありません。なので、明日には仙郷から出ていってくださいね」

「は……？　じよ、冗談ですよねっ？」

「仙女からそう言われた燐は、口をポカンと開け、慌てて追い絶る。」

「冗談ではありませんよ。燐がこの仙郷に来て五年。未だに水の上を歩くことも、空を飛ぶこともできませんよ。さすがに仙人としての素質がないことくらい自分でも気付いているでしょう？」

ドキリ、と燐の心臓が跳ねた。

「た、確かにそうですけど……こ、これからできるようになる可能性も、まだ多少はあるのでは、と……」

燐は苦し紛れに言い訳したが、仙女は首を横に振る。

「五年で一つもできないのなら、今後も無理でしょう」

「で、でも、動物と話すことができます！　こ、これも仙人が使える力の一つだったはずで——」

「いいえ。その力は人間が稀まれに持つ異能の力の一つであって、仙人の使う力とは別物です。その力があつたから貴方を仙郷で受け入れましたが、まさかここまで素質がないとは」

「仙女はふうとため息を吐く。

「そんな……」

燐は絶望で目の前が真っ暗になる。体から力が抜け、ガクリと膝をついた。

「貴方はまだたったの十七歳なのです。仙郷から出て、これからはただの人として生きなさい」

「い、嫌ですっ！」

燐は思わず自分の膝に爪を立てた。

燐には、五年前の辛い記憶がまだ色濃く残っている。

いや、五年前のあの時だけではない。燐にとって、自分以外の人間は全て恐怖の対象でしかなかった。

今更、理想郷だと思っていた仙郷から出て暮らすことなど耐えられない。

燐の生まれた国では、燐光りんこうのようにほの光る不思議な青い瞳は、呪われた瞳として忌み嫌われていた。

燐は五歳かそのらの時に捨てられたのだ。

微かに残る記憶から、元はかなり裕福な家にいたように思う。

その後に残された家の家より、記憶にある室内や調度は豪華だった。

ただし、部屋の外に出ることは許されず、年輩いた使用人が燐の面倒を見てくれた。だから、両親の顔も覚えていないし、どうして捨てられたのかも知らない。

もしかしたら、忌み子の燐を隠して育てるのに限界を感じたからかもしれない。

その後、燐は労働力を期待されて小さな村に拾われ、わずかな食事と引き換えにこき使われた。挙句、何か悪いことが起きれば全て燐のせいになれ、暴力を振るわれた。

気味が悪いと目を潰されかけて、逃げたこともあった。

そんな燐が生きてこられたのは、忌み嫌われる原因でもある異能のおかげだった。

しかし五年前、燐の目を潰し、舌を抜いてから娼館しょうかんに売り飛ばそうと村人が話しているのを聞いてしまい、山に逃げた。

すると村人は、燐が山の動物を使って復讐してくると思ひ込み、山狩りをして燐を

殺そうとしたのだ。山中で動物に助けられ、それでも力尽きそうになったところを、仙女の弟子でしである天翼童子に拾われ、仙郷に連れてきてもらったという経緯がある。燐にとって、この仙郷から出るということは、再びそんな生活に戻るのと同じ。

出ていけと言われて、わかりましたと受け入れられるはずがなかった。

燐だって、自分に仙人としての才能がないことに気付いていたし、ずっとこのままではいけないことも薄々わかっていた。

けれど、どうしても人間の世界には戻りたくない。

「お、お願いします。なんでもしますから仙郷に置いてください！」

燐はなりふり構わず、仙女に向かって頭を下げた。

「いいえ。燐、人の世界で自分のやりたいことや楽しいことを探さない。きつと、貴方を理解してくれる人が現れますよ」

「やりたいことなんてありません。この仙郷で穏やかに過ごすことだけが望みです」
これまで燐に与えられたのは罵声ののしりや暴力ばかりで、やりたいことなど考えたこともなかった。それに呪われた瞳を持っていては普通に働くのも難しい。

うんと言わない燐に、仙女は困ったように息を吐く。

「……あのお、仙女様」

そう嘴くちばしを入れたのは天翼童子だった。

ひどく申し訳なさそうに羽を縮めてはいたが、仙女を真っ直ぐに見つめている。

「燐の事情を考えると少し厳しいのでは……。せめて、もう少しだけでも猶予ゆうよを与えてはもらえませんか。急に追いつくなんて、燐があまりにも可哀想です」

「天翼童子い、ありがとう……。！」

燐は半泣きで天翼童子の羽に頬擦りをしたが、翼でベチンと叩かれた。

「こら、仙女様の前なんだから、しっかりして」

天翼童子はこれまで燐を甘やかしていたわけではない。時に厳しく色々なことを教えてくれた。特に礼儀作法には厳しい。

そんな天翼童子が燐を庇かばったことで、仙女も心を動かされたらしい。

「天翼童子がそこまで言うのなら、一度だけ機会をあげましょうか」

嘆息混じりの仙女の言葉に、燐は顔を上げた。

「燐に試練を課します。妾わらわにはかつて仙郷から出ていってしまった弟子でしがいます。出ていく際に妾の指輪ゆびわを持ち出してしまったのです。その指輪を見つけ出し、持ち帰れたならば、再びこの仙郷に住むことを許しましょう」

「指輪、ですか？」

燐は目をぱちくりとさせた。

「ええ。金の土台に、燐の目のような青く美しい宝石のついた指輪です。きっと、貴方なら見たらすぐにわかるでしょう。何年かかっても構いません。五年でも、五十年でも待ちましょう」

「その指輪はどこにあるのですか」

「ふふ、それを探すのが試練ですよ。もちろん、途中で指輪探しを諦めても咎とがめません。ただ、仙郷に二度と戻れなくなるだけ。この試練を受けるにせよ、断るにせよ、貴方が明日、仙郷を出ていくことには変わりませんからね」

「う……。わかりました。やります！ 必ず指輪を探してきます！」

燐に選択肢せんたくしなどないのだ。やけっぱちな気持ちでそう叫んだ。

「受け入れてもらえてよかった。では、饞別せんべつに仙術をかけてあげましょう」

仙女はふうつと燐に息を吹きかけた。

燐の鼻腔びこうに甘い花の香りが漂たなよう。その香りに、脳しびがジンと痺れる気がした。

「さあ、水面に顔を映してごらんさい」

「え？」

燐はキョトンとした顔で蓮の葉の上で四つん這はいになると、水鏡と化した湖の水面

に顔を近付けた。

驚くことに、さっきまで湖と同じ色をしていた燐の瞳が、ごく平凡な黒色に変わっている。

「この仙術は妾が解かない限り、燐の寿命まで持つでしょう。ただし、一つだけ気を付けなければならぬことがあります——」

「すごい」

燐は仙女の言葉の途中で目を輝かせた。

「これなら指輪を探しに行けます！　ありがとうございます、仙女様。私、必ず見つけて戻ってきますから！」

「こら、燐！　仙女様のお言葉は最後までちゃんと聞きなさい！」

興奮した燐は、天翼童子にお小言とともにお尻をペチンと翼で叩かれたのだった。

翌日、天翼童子に運ばれて燐が下界に向かったのは、まだ薄暗い早朝のことだった。周囲には朝靄が立ち込め、夢の中にいるかのように景色がぼんやりと白く滲む。

天翼童子の脚に掴まっていた燐は、街道近くの岩陰に降ろされた。

周囲は畑だったが、農作業もまだ始まっておらず、無人の畑はシンと静まり返って

いる。

「ありがとう、天翼童子」

「うん」

「そこが街道ね。適当に進めば村だか町だかに出るのかな」

燐ははあ、と大きなため息を吐いた。

指輪を探すといってもなんの手掛かりもない。仙郷に戻るための唯一の方法ではあるが、燐の異能を使つたとしても、砂漠で砂金一粒を見つけ出すのに等しい。

「……常識的に考えて、見つかるわけないか」

ついそんな言葉が出てしまう。

条件を出された時は、何がなんでも探し出してやると思っていたが、考えれば考えるほど無理難題としか思えなかつた。

「燐、別に探さなくてもいいんだよ。今の君は仙術で黒い目になっているから、もう、見た目で迫害される心配はない。友人や伴侶を見つけて、ごく普通の女の子として愛し愛される、そんな幸せな暮らしができるんだよ。仙女様も、燐が憎くて仙郷を追放したんじゃない。君に幸せになつてほしくて——」

「——そんなの無理だよ」

燐は天翼童子の言葉を遮った。

「目の色が変わっても同じ。私がこれまで会った人間は、みんな自分のことしか考えない嫌なやつばかりだった。そんな人たちがいるところで、私は幸せになんてなれっこない」

吐き捨てるように言う燐を、天翼童子は心配そうに見つめる。

「燐……」

「いいんだって。親に捨てられた私には愛とかそういうの、よくわかんないし」

「……あのね、燐。僕は君の生まれを知っている。君は——」

「うわあああつ！ やめてっ！ 私を捨てた人のことなんて、聞きたくないっ！」

燐は万が一にも耳に入らぬよう、大声を出して耳を塞ぐ。

これまで燐は何度も裏切られ、死ぬような思いをたくさんしてきた。

そんな幼少期を送ったせいか、家族愛も友愛も異性との恋愛も、愛と名のつくものなど何一つとして理解できなかった。

例外は天翼童子への親愛の情だけだ。

「私は指輪を探すよ。何年かけても……ううん、一生をかけてもいい」

燐にとって、心の拠り所はそれしかない。

もう、人に裏切られ、辛い目に遭うのはこりごりだった。

「決心は変わらないんだね」

「うん」

「はあ、しょうがないなあ」

天翼童子は嘆息混じりにそう言った。

「あのね、燐、指輪は後宮にあると思う」

「後宮？」

天翼童子の言葉に、燐は目をぱちくりとさせた。

「後宮って王様が暮らしている場所だよ。そもそも、ここはどこなの？」

キョロキョロと見回すが、周囲には畑が広がるばかり。

燐の生まれは青衍という小国である。壁のように聳える連峰に囲まれ、どこか閉塞感のある場所だった。山から吹き下ろしてくる風で、頬に当たる風はもつと冷たかった気がする。

ここからでは山の稜線すら見当たらず、記憶の中に一致する場所はない。

「ここは金鼎国。青衍のずっと南にある大きな国だね」

「ああ、何十年だか前に青衍を属国にしたっていう国だっけ」

天翼童子が何かの折に話してくれた国の名前だ。

「ここが青坊でないとかわかっただけでホッとする。少なくとも燐の顔を知っている人間は、このあたりにはいないということが確定したのだから。」

畑や周囲の木々も、どこか冷たく拒絶するような雰囲気だった青坊とは違う。

南に位置するということは暖かいのかもしれない。それなら凍死の心配もしなくていい。

「件の弟子は仙郷を出た後、金鼎国の後宮に向かったんだ。随分昔のことだから、本人はもういない。でも、指輪はまだそこにあるだろう」

「そういうのも千里眼でわかるの？ 助かるけど、そんなこと私に言っちゃって、後で仙女様に怒られたりしない？」

「特に口止めはされていないからね。僕は燐に幸せになってほしいんだ。指輪を探すことに一生をかけるくらいなら、さっさと見つけて仙郷に帰ってきてくれた方がマシっものさ。金鼎国の都まで、ここからしっかり歩けば一日程度といったところかな。まずは都に向かい、後宮で働けるように頑張ってごらん」

「……うん。ありがとう、天翼童子」

燐は天翼童子にぎゅっと抱き付き、柔らかな羽に頬を擦り寄せる。

潤んだ目から零れた涙が羽の上で球になり、コロコロと転がっていった。

「燐は甘えん坊だな。もう十七歳になるくせに」

「うるさい。しばらく会えないんだから、ちよつとくらい甘えさせてよ」

「まったくもう、仕方のない子だなあ」

天翼童子はよしよしと、翼で燐の頭を撫でた。

「燐にはこれまで僕が蓄えた、たくさんの知識を教えるんだからさ。きつとこれからの役に立つよ」

「え、あれってただの雑談じゃなかったの」

「今気付いたのかい？ 雑談で星の動きまで覚えさせないさ。いつか仙郷から出ていくことがあっても、燐が苦労しないようにって思ったんだよ」

この五年で、天翼童子は本当に色んなことを燐に教えてくれた。

その知識がなんの役に立つのか、ということまで。

「正直に言うと、星の動きより、色気のある仕草集が一番役に立たないと思った」

「ひどいなあ！ 絶対いつか役に立つってばー！」

「まあ色気はともかく、他の知識はありがとう、師匠」

冗談めかした燐の言葉に、天翼童子はカチカチと嘴を鳴らして笑った。

「それじゃ、僕から弟子への餞別だ」

天翼童子はそう言っ、どこからともなく包みを取り出した。

「お弁当と、少しだけこの国の通貨。それから、燐がお腹を壊しても平気なように、毒消しの仙丹も。三回分しか用意できなかったから、無闇に拾い食いするんじゃないよ」

「しないったら」

天翼童子は拾った五年前の印象のままなのか、たびたび燐を幼い子供扱いしてくる。しかし実際、昔の燐は空腹に耐え切れず、木から落ちた果実やお供えの餅など、食べられるものはなんでも拾って食べてはお腹を壊していた経験があるので、あまり強くは言えない。

包みを確認すると、水の入った竹筒と大きな葉に包まれたお弁当。それから数枚の銅銭に毒消しの赤い葉が三粒。

そして、燐が見たことのない、粉の入った紙包が一つあった。

「こっちの紙包は？」

「もし道中で盗賊に襲われたら、この紙包を投げつけて逃げるんだよ。中身は眠り粉だ。熊だつてたちまち眠り、数時間は目が覚めない。まあ、ないことを祈るけど」

「……ありがとう」

天翼童子の心配が痛いほど伝わってくる。ないに越したことはないが、何かあっても逃げられると思えば燐にも安心感があった。

燐はお守りのように、眠り粉の紙包を胸元に大切に仕舞い込む。

「それじゃあ、燐。僕は仙郷に帰るよ。君も出発しな」

「うん。ありがとう、天翼童子」

「お札の言葉はもう聞いたよ」

「そうじゃなく。ずっと私に親切にしてくれたこと。私、絶対に指輪を見つけて仙郷に戻るから」

「……うん。面白い土産話を期待しているからね」

そう言って飛び立った天翼童子の白い羽は、あつという間に朝霧の中に消えていった。胸がキュッと切ない。寂しくないと言えば嘘になる。

けれど後宮に指輪があることがわかったのだから、遠くないうちに試練を達成して仙郷に帰れるはずだ。そう思えば、先行きの不安や、人の世界で生活する疎ましさにも耐えられる気がした。

「さてと、行きますか」

燐は風除けの布を被り、髪を隠した。この国では、燐の裾すそせたような灰色の髪は珍しく、目立つのだと天翼童子から聞いていた。

季節は秋の初めで、午前中でも歩けば汗ばむ陽気だった。

風除けの布を被ると余計に暑かったが、布を取る勇氣はない。

(本当に大丈夫だよね……)

燐は水辺を見かけるたびに瞳の色を確認した。

小さな溜め池を覗き込むと、黒い瞳の自分が映り、ホッとする。

「あら、池に落とし物でもしたの？」

突然、通りかかった人に話しかけられて、燐は肩を震わせた。

「ひっ……！ な、なんでもない」

燐は悲鳴を呑み込み、ブルブルと首を横に振った。

「それならいいんだけど」

話しかけてきた人は燐の態度に不思議そうにしていたが、顔を引き攣くわらせることも、眉を顰そめることもない。

(瞳の色が黒いだけで、全然違うんだ)

しばらくドキドキしていたが、仙術の効果を感じてホッと息を吐いた。

最初は人とすれ違うたびにびくついてはいたが、何度か繰り返すうちに、燐になんの関心もない人々に慣れていった。

しばらく歩き、街道沿いで休憩してお弁当を食べた。

後宮がある都まで、あとどれくらいだろう——そんなことを考えた時、遠くで馬の嘶いなきと、暴れ回る蹄ひづめの音が聞こえ、燐は弾かれたように顔を上げた。

嘶いなきはまるで悲鳴のように激しかった。

実際のところ、動物の言葉がわかる燐には「痛い、痛い！」という馬の悲鳴として聞こえてくる。ただごととは思えない。

「どうしたんだろう……」

燐は押し寄せる不安感に眉を寄せた。

立ち止まって様子を窺っていると、馬の悲鳴が聞こえる方から、わあわあと声を上げた人間が幾人も走って逃げてくるではないか。

「ねえ、何かあったの？」

そのうちの一人に、燐は思い切って尋ねる。

「あつちで馬が暴れ回ってるんだ！ 危ないからあんたも逃げな！」

青い顔をして逃げてきた男は、足を止めずにそう言くと、そのまま走り去った。

男が走ってきた方角に目を凝らすと、遠目に土埃が立っている。その中心で黒い馬が暴れ回っているのが見えた。

「腹が痛いっ。痛いよう、助けてくれえっ！」

同時に聞こえてくる、助けを求める悲痛な声。

聞いているだけで胸がギョツと痛み、いても立ってもいられなくなる。

逃げ惑う人波を逆走し、馬がいる方に向かう。

「お嬢ちゃん、そっちは危ないよ」

親切な人間が燐を引き止めようとするが、燐は足を止めずに走った。

馬に近付くにつれ、人の姿は減っていった。

黒毛で立派な体格の馬の姿がはつきり見えるくらいまで近付くと、周囲から人の姿は完全に消えていた。もう全員避難しようだ。

暴れている馬は、毛質がよく筋肉も美しく盛り上がっている。かなり上等な馬なのだろう。少なくとも農耕馬ではなさそうだ。

馬が暴れて蹴ったせいとか、街道に沿って生えている木々が何本もへし折れていた。

そのうちの、幹が折れて下半分しかなくなった木の陰に隠れ、様子を窺う。

馬は口から紫色の泡立った涎をポタポタと垂らしていた。

目は充血し、腹もびくびくと脈打っている。

一目見ただけで、何か食べてはいけないものを食べたのだろうと、天翼童子から色んな話を聞いていた燐にはわかった。

馬は暴れたくて暴れているのではない。苦しくても胃の構造上吐けないのだ。だから苦痛から逃れたくて、体が勝手に動いてしまっているのだろう。

「可哀想に……」

何を食べたかは知らないが、このままにはしておけない。

燐は天翼童子からもらった毒消しの仙丹を取り出した。

赤い粒を手のひらの上で転がす。

一刻も早く飲ませたいが、暴れる馬の口に仙丹を入れるのは無理だ。

（異能を使うしかない、か……）

あまりこの手段は使いたくなかったが、仕方がない。

散々馬が暴れ回ったので、周囲に人の姿はない。乗り手の姿もないところを見ると、きつと、どこかで振り落とされてしまったのだろう。

それも燐には都合良かった。

燐はすうはあと深呼吸を繰り返すと、全身の力を丹田に込めて口を開いた。

「——止まれっ！」
その言葉とともに、丹田たんぜんに熱く滾たぎっていた何かがすうつと抜けて、鎖くさりのように馬を縛りつけるのを感じた。

同時に両方の目がカアツと熱くなる。

燐が命令した途端、暴れ回っていた馬がぴたりと足を止めた。

いや、止めたなどというものではない。燐の異能により、強制的に動くことを禁じられたのだ。

ビクンと馬は痙攣けいれんし、苦しみにもがくこともできず、その場に膝をつく。

その際に、燐は馬のそばに走り寄った。

「口を開けなさい！ さあ、この仙丹せんたんを飲んで」

馬は充血した目を剥むきながら、訳もわからぬうちに口を開け、言われた通りに仙丹せんたんをゴクツと飲み込む。

それすらも馬の意思ではない。

燐が馬に命令し、強制的に体を動かしていた。

これこそが、燐の異能の本当の力。

——獣操じゅうそうの力だ。

「もう大丈夫だから」

燐は優しく声をかける。

仙丹せんたんを飲み込んだ馬はみるみるうちに穏やかな呼吸になった。

何せ真正銘本物の仙丹せんたんなのだ。効果は絶大である。

貴重な仙丹せんたんをもらった当日に使ってしまったけれど、まだ二粒残っている。

天翼童子に言われたように拾い食いでもない限り平気だろう。

「怪我はない？ まだ苦しいかもしれないけれど、水をたくさん飲めば落ち着くからね。天翼童子の仙丹せんたんはとっても効くから」

馬の呼吸はすっかり落ち着き、ぶるる、と甘えるように鼻を鳴らす。

それがお札を言っているように聞こえて燐は微笑む。

「ふふ、よしよし」

燐は馬の鼻をそつと撫でた。短い毛は艶つややかで、触っていてホツとする。

「無事でよかった——」

「——君は……一体、何者だ」

突然のそんな声に、燐は弾かれたように振り返った。

（まずい、人が——）

半ばから折れた木の背後に、片膝をついた男の姿があった。さつき燐がいた位置からは死角になっていて、声をかけられるまで、まったく気が付かなかつた。

男の黒水晶のような目と視線ががち合う。

その瞬間、燐は息をすることを忘れていた。

白皙はくせきの肌に涼やかな目元をした端正な顔立ち。

諭なえるなら、月光のよう。

左目の下に黒子ほくろがあるのが、妙に印象に残った。

燐とそういくつも離れていない印象の若い男で、上質な絹に金糸で刺繡ししゅうされた丈

の長い服装からして、身分の高い人物なのは間違いない。

もしかして、この馬の乗り手だろうか。

艶つやのある黒絹のような髪を馬の尾のように結んでいた。頬に一筋、はらりと乱れた

髪がかかっているのが艶なまめかしい。怪我でもしているのか、形のいい眉を顰ひそめている

のが、男の色気に拍車をかけている。

仙人ならともかく人間で、それも男性でこんなにも綺麗な人を見たのは初めてだっ

た。そんな場合ではないのに、燐は口をポカンと開けて見入ってしまった。

燐が我に返ったのは、男の呟ささやき声のおかげだった。

「青い、瞳……？」

燐の瞳を見て、男の切れ長の目が大きく見開かれる。

——まずい。

「その仄ほのかに光る青い瞳、君、まさか青坊せいぼうの——」

男の言葉にさあつと燐の血の気が引いた。

慌あわてて目の前に手を翳かざすが、遅すぎる。

見られた。

見られてしまった。

燐は男に背を向けると、その場から脱兎だつとの如く逃げ出した。その勢いで被かっていた

風除けの布ぬいが翻ひるり、飛んでいきそうになるのを慌あわてて押さえる。

「ま、待て。……待ってくれ！」

男は燐を追おうとしたが、わずか数歩でガクリと膝をつく。暴れる馬から振り落と

され、怪我をしているのかもしれない。燐を追ってこれられない様子だ。

その隙にと、燐はがむしゃらに足を動かし、男から離れた。

何度か振り返り、馬が見えなくなるくらい距離を取っても、足は止めない。

しばらく走り続けた先で、街道と細い農道が交差していた。燐はそのまま街道を逆

走するのではなく、道を曲がって農道を進むことにした。息がすっかり上がり、喉が焼けるように痛み始めた頃、ようやく足を止めた。

背後を見ても追ってくる気配はない。

足がガクガクと震えていた。散々走った疲労のせいだけではない。

燐の本当の瞳の色がバレってしまった恐怖の震えだった。

(どうしよう……見られた！)

燐は人目のありそうな開けた場所にいることすら耐えられなかった。

農具を入れる用途らしい古びた小屋を見つけると、その裏手に回り、壁際にうずくまる。周囲に生えた灌木がちょうどいい目隠しとなり、うずくまった燐の姿をすっぱりと隠してくれる。

心臓がドクドクと激しい音を立てていた。

すうはあと何度か深呼吸をするうちに、少しずつ気持ちが悪くなり落ちていく。膝を抱えた燐は、風除けの布を体に強く巻き付け直した。

「……大丈夫。布を被っていたし、はっきり顔は見られてない……はず」

風除けの布を目深に被っていたから、特徴的な灰色の髪は見られていない。布のせいで顔も見えにくかったはずだ。そう何度も自分に言い聞かせる。

——燐の本当の能力は動物を強制的に操る『獣操の力』だ。動物と意思疎通もできるが、それは獣操の力の一端に過ぎない。

この力の拘束力は強く、獣の本能よりも燐が命じたことが優先される。

さっきの馬のように、まともに声が届く状況でなくても。

昔から、青彷彿では燐光のように青く光る瞳は、獣操の力の持ち主だという伝承があった。

だから青彷彿の人間は青い瞳を厭い、青い瞳の持ち主である燐を恐れるのだ。

素性がバレたら、青彷彿にいた時と同じ目に遭うかもしれない。そんな恐怖が沸き起こり、ガタガタと体が震えてしまうのを止められない。

さっきのように獣操の力を使うと、仙女にかけてもらった仙術が効果を失い、一時的に瞳の色が元に戻ってしまう。気を付けるようにと、忠告されていたのに。

ここは青彷彿ではないが、獣操の力について知っている人間もいるのだろう。

さっきの男も燐の目を見て青彷彿の、と言いかけていた。

(助けない方がよかったのかな……ううん、そんなこと、ない)

あの馬を見捨てることはできなかった。

燐は、ぐっと腹に力を込めるが、さっきのように丹田が煮え滾るような熱さを感じ

ない。獣操じゆうそうの力は一度使うとしばらく使えなくなるのだ。今、瞳の色はどうなっているのだろう。

もしまた誰かに見られたらと思うと、目を開けているのすら恐ろしい。燐はギョッとまぶたを強く閉じた。

ふと、どこからか聞こえてくるガサゴンという物音に、燐は目を覚ました。

周囲は明るく、鳥が騒さわがしく鳴いていた。

畑もやから霧もやが立っている。

どう見ても朝の景色だ。

走ったからだけでなく、仙郷から出たばかりで疲れていたのか、まぶたを閉じている間に深く寝入ってしまったようだ。

燐を起こした物音は、農夫が小屋の農具を取りに来た音だった。勝手に小屋に入らなくて正解だった。

燐は農夫と顔を合わせないように、彼が立ち去るのを待つてから、ゆっくりと農道に向かう。

途中、用水路の水面に顔を映してみると、目の色は黒に戻っていた。

ホッと息を吐くと、途端に燐のお腹がぐう、と音を立てる。

「そうか、もうご飯はないんだった」

天翼童子のくれたお弁当は全部食べ切っており、これからは食事も寝床も全て自分でどうにかするしかない。

燐はため息を吐きつつ、都を指し指出発することにした。

天翼童子は都まで一日と言っていたが、遠回りしたせいもあって、燐は二日と半日をかけ、ようやく海のそばにある都に辿たどり着いたのだった。

二章

都はとにかく人が多かった。

やたらと騒々しく、どこもかしこもごみごみしていて、静かで綺麗だった仙郷とは大違いだ。

燐は大通りを歩きながら、風除けの布を強く頭に巻き付けてため息を吐く。

騒々しさに顔を顰しかめながらも一応耳を澄しやうませていたが、青い瞳じゆうそうや獣操じゆうそうの力について、

特に噂にはなっていないようだ。

正直なところ、お尋ね者になつていなくて安心した。

とにかく今は、仙女の指輪を探すために、後宮で働く方法を探さなければ。そのためには人に話しかける必要がある。

さらに働くとなれば、街道を歩いていた時より人に関わらなければいけない。考えただけでうんざりする。

(早く帰りたい……)

天翼童子は以前、職を探す方法を説明してくれたことがあった。

手数料と就労後の給金の一部を支払う契約で希望の仕事を紹介する、仲介屋という職業があるのだとか。

天翼童子から読み書きを教わっており、字が読めるのは幸いだった。

キョロキョロ見回して、仲介屋と書かれた看板を探した。

店員や客がたくさんいる店には、気後れしてしまつて入りにくい。

結局、少々寂れている雰囲気、店員が一人しかいない仲介屋を選んだ。

「あの……後宮で働きたいんですけど、仲介つてしてくれますか」

燐はドキドキしながら店に入り、退屈そうにしている仲介屋にそう尋ねた。

「あ？ 後宮だあ？」

強面の仲介屋に強い語調で返され、燐はビクツと肩を震わせる。

いきなり後宮で働きたいと言うのは、おかしいことなのだろうか。

緊張に、燐の背中に汗が伝った。

「夕、ダメなら他を当てるけど」

「はいはい、後宮ねえ。たまにいるんだよなあ。田舎から出てきて、煌びやかな後宮で働きたがる若い女つてよお」

仲介屋はガリガリと頭を掻きながら、ぐだぐだとそんなことを独り言ちる。

「まあ仕事だから構わんけど。それで、出せる金は？」

燐はホツとする。特に怪しまれなかつた様子だ。

天翼童子からもらつていたこの国の貨幣を仲介屋に見せると、舌打ちで返された。

「それっぽっちゃかよ。うーん、その被ってる布はなかなか質がよさそうだな。その布を寄越したら仲介してやつてもいいが」

「えっ……」

燐の風除けの布を握る手が汗ばむ。この布は天翼童子が用意してくれたものだ。

しかもこれを渡してしまえば、目立つ灰色の髪を人目に晒さなければならなくなる。

「嫌なら他に行きな。だが、それっぽっちゃどこも仲介はしてくれんだろうがな」
男はしっしつと追い払うように手を振る。燐は唇を噛んだ。

どちらにせよ後宮で働くことになれば、布を被ったままではいられない。

「……わかった。渡す」

燐は決心して、仲介屋に布を渡した。

「なんだ、おかしい髪の色だな。若いのに婆ばあみたいじゃないか」

男の態度から、やはりこのあたりでは燐の髪は変な色だと思われるのだとわかる。

結局、布まで渡したのに、身元保証がないと宮女になるのは無理だそうで、後宮内の下働きを仲介してもらうことになった。

仲介屋はニタニタと笑みを浮かべ、燐の渡した布を撫でている。

もしかすると騙だまされたのかもしれない。

(これだから嫌なんだ)

人間なんてどいつもこいつも浅ましく、弱者から奪うことばかりを考える。

燐は眉を寄せた。

それでも、一つだけ幸いなことに、下働きはいつでも人手が足りないとのこと、燐は即日その後宮に入ることになった。

どうせ目的は指輪を見つけることだから、仕事はなんでもいい。

それに後宮内では衣食住は全て支給されるのだから、下働きでもじゅうぶんだ。

(さっさと指輪を見つけて仙郷に帰るんだ)

後宮の門を越えた先で待っていたのは、腰の曲がった老女だった。

彼女が下働きの先輩になるらしい。

「あなたが新人だね。これからキビキビ働いてもらうよ」

老女はそれだけ言うと、燐の挨拶も聞かずにさっさと歩き始めた。

杖をついているのに歩くのが早い。燐は小走りですら老女についていった。

「……ここが後宮」

最初に思ったのは広いなということだった。

後宮の周囲は燐の身長の数倍の高さがある塀にぐるりと囲まれているのだが、あまりの広さに閉塞感は一切感じない。

門前など、まるで広場のようだ。門の正面から真っ直ぐに伸びる道は広く、中央にだけ真っ白な石畳が敷かれている。

耳を澄ますと微かに潮騒しほざが聞こえた。

後宮は海に迫り出した屋の上にあると聞いていた。立地的に、天然の要塞になっているのだな、と燐は天翼童子から得た知識で考える。

キヨロキヨロと見回すと、後宮内の宮殿と思しき立派な建物の屋根がいくつも見えた。その中で一際大きい宮殿が山のように聳えていた。

指輪はどこにあるのだろう。

そんなことを考えて、余所見をしていた燐は老女に杖で小突かれた。

「いたっ！」

「ほら、ぼさつとしてるんじゃないよ」

休む間もなく、さっそく仕事道具の木桶やら雑巾やらを渡されると、宮殿同士を繋ぐ外廊下に連れてこられた。

「いいかい、ここの廊下の床をよーく磨くんのだ」

燐たち下働きは、決められた場所の床をひたすら磨いていくらしい。

老女は名乗らず、燐も彼女から名前を聞かれなかった。

他人に興味がない性質のようだ。

仕事さ、えきちんとやればいいというのは、今の燐にはちようどいい。

ただ這いつくばって床磨きをしていれば、煩わしい人間関係もないようで、燐は

少しだけホッとしたのだった。

後宮内はちよつとした街くらいの広さがあり、皇帝と妃が過ごす大宮殿がある区画、皇子や皇女の小宮殿がいくつもある区画、それ以外の用途に使う区画などで、ちよつど「田」という字のように四分割されているそうだ。

後宮は思っていたよりずっと広いのに、担当する清掃場所は決められていて、勝手にウロウロすることはできない。後宮に来ればすぐに指輪が見つかると思っていたが、そう上手くはいかないようだった。

おまけに身分差による決まり事がやたらと多い。

後宮内の大路ですら、中央の真つ白な石畳は、皇族とその従者だけしか通れない決まりで、宦官や宮女はその脇。燐たち下働きに至っては、道の隅っこをコソコソ通らなければならぬのだとか。

それらは全て、掃除を始めると急に口数が増える老女から聞いた話だ。

燐も最初こそ相槌を打っていたが、老女は会話ではなく喋りたいだけのようで、燐が返事をしなくても、特に気にした様子もなく一人でずっと喋り続けている。

「あたしらは道の隅っこを歩かなきゃいけないのさ。あんたみたいに若い娘はよく勘

違いするけど、床を磨いていたって、皇子様とお近付きになんてなれやしないからね。それに自分が可愛いなら、お偉い方には近付かない方がいい。あたしらみたいな下働きは同じ人間扱いきれないんだよ。あたしらのことを野の獣だとも思ってるやがる。でも、あいつらこそ本性は獣なんだ。いいかい、くれぐれも気を付けな」

老女の言葉を聞き流しながら、燐は黙々と床を磨く。

水で濡らした束子でしつかり磨き、その後は乾いた雑巾で水気を拭き取るのである。「そこ、水気を残さないようにね。以前、濡れたままの床を皇子様が通って、足を滑らせてお綺麗な着物の裾を濡らしてしまったことがあった。皇子様はひどく怒って、その時の床磨きを蹴飛ばしたのさ。そいつは肋の骨が折れて辞めちまった」

燐はその言葉に眉を寄せた。

「……物騒な話だね」

「ふん、言っておくがそんなもの序の口さ。もつと昔……あたしの若い頃にはね、宮女が惨い殺され方をしたことだつてあるんだから」

やっぱり人間なんてろくもんじゃない。そんなことを考えていた燐は、慌てた老女に引つ張られた。

「ほら、お偉い皇子様のお出ましだ」

遠くから男が歩いてくる。

老女は慌てながらも石畳の水気をしつかり拭き取り、廊下の端に避けた。

「両手両足を地面につけて礼をするんだ。顔は上げちゃいけない」

老女は膝をつきながら早口で燐に指示する。

燐も端に避け、老女を真似て膝をつき、深々と頭を下げた。

そんな燐の前を、煌びやかな絹の裾を翻して皇子が通っていく。足を踏み出すたび、腰から吊るした佩玉が擦れてシヤランシヤランと軽やかな音色を奏でていた。

皇子が通り過ぎたので、もういいかな、と燐は顔を少しだけ上げた。

途端に、あっ、と声を上げそうになり、必死に呑み込む。

皇子の姿に見覚えがあった。

つい先日、暴れる馬の近くにいた、あの男だった。

よりにもよって、そんな偶然があるだろうか。

斜め後ろからチラッと覗き見たただだから、顔をはっきり確認したわけではないが、左目の下に黒子が見えた。

背格好や、後頭部で馬の尾のように結んだ黒髪も同じ。

皇子はもうとつくと通り過ぎていたが、燐は再度顔を伏せた。

心臓が激しく音を立てる。

額から流れた冷や汗がボタリと零れた。

あの時、燐は青い目を見られてしまった。それに、獣操じゆうそうの力を使う様子も。とはいえ、彼が燐の顔を見たのはほんの一瞬しゆんだっただろうし、灰色の髪は隠していたから、今のようになを通るくらいでは気付かれないはずだ。

そうは思っても、恐怖心は抑えられない。

もし見つければ、呪われた目だと因縁いんえんをつけられ、目を潰されたり、殺されたりするかもしれない。過去の記憶が脳裏のうらを過り、燐はギュッと手を握って耐えた。

燐はそのまま地面に額がつきそうなほど顔を伏せ、老女に肩を叩かれるまですっとそうしていた。

それから数日経っても、燐は相変わらず床磨きの仕事をしていた。

燐がここにいる目的はこの後宮のどこかある指輪を探し出すこと。

一刻も早く見つけ出して仙郷に帰りたいのだが、こう毎日床磨きの仕事をしていては指輪を探し回ることもできない。

せめて動物がいたら、探す手伝いをしてもらえるのに。

そう思ったが、後宮には厩舎うまやしの馬くらいしかいないようだった。

だが、老女から後宮にやたらと鼠ねずみが多いという情報を得た。

どこかの使われていない建物に、大量の鼠ねずみが巣食っているのだとか。

鼠ねずみならあちこちに入り込める。

指輪を探す手伝いしてもらえたら、かなりの範囲を探せるかもしれない。

せっかくの情報だったが、床磨きの仕事は拘束時間が長く、後宮での自由度も極端に少ない。休憩時間であっても関係のない場所をうろついていると、宦官かんがんや宮女から叱られ、しつしつと、まるで野良犬のように追い払われるのである。

(本当、人間って嫌だな)

早く仙郷に帰りたいのに、帰るための指輪探しがままならない。

日々、そんな腹立たしさが募つものっていく。

なんの成果も得られないまま、あつという間にまた数日が経ってしまった。

床を磨きながら、ふと、このところ、行き交う宦官かんがんや宮女の数が増えている気がした。後宮全体にどこか慌ただしい雰囲気を感じる。

「何かあったんですかね」

「さあ、知らないね。どうせあたしには関係のないことさ」

そんな会話を聞きつけたのか、近くを歩いていた中年くらいに見えるかんがん宦官が足を止めた。口を開くと、金歯がキラッと光る。

「おや、知らんのかい。紫貴様が太子に立たれたんだよ。それでもうじき大きな式典があるから、どこの部署も忙しいんだ」

「紫貴様？」

燐は知らない名前に首を傾げる。

「皇帝陛下のご長男だ。えらく綺麗な顔で、長い髪を馬の尾みたいに結んでいる方を見なかったかい？」

「ああ……」

燐は言葉を濁す。彼が前を通るたび、顔を見られないよう気を付けていた。そんなことを考えた燐に、かんがん宦官はジロジロと無遠慮な視線を送ってくる。

「ふうん、お前、ちよつと顔をよく見せてみな」

燐は眉を寄せた。

「よく見たらまだ若いじゃないか。式典用の宮女が全然足りなくて、猫の手でも床磨きの手でも借りたいくらいなんだ。ちよつと一緒に来てくれ」

突然腕を掴まれ、燐はビクツと震える。

「な、何っ？」

「おい、婆さん。この娘を借りていくぞ。いいな」

「いいわけないだろっ！ お返しっ！」

老女が杖を振り上げて怒っているが、かんがん宦官は気にした様子もない。

「式典が全部終わったらな」

飄々と言いつ返し、掴んだ燐の腕を引っ張って、どこかに連れていこうとした。

「ま、待って。どういうこと？」

燐はわけがわからず、かんがん宦官に抵抗して、足に力を込めて踏ん張った。

「だから、宮女が足りないと言っただろう。もう若い娘ならなんでもいいから、かき集めているところだ。安心しな。ちゃんと正規の手続きをしてやる。給金がうんと増えるぞ」

「そうじゃなく。何をさせられるんですか」

「式典の準備に片付けに……とにかく色々さ。少なくとも掃除よりは楽だと思うがね。ちゃんと休憩もあるし、綺麗なお仕着せを着られる。食事も今よりいいものが食べられるぞ」

眉を寄せて抵抗していた燐は、かんがん宦官の言葉に力を抜いた。

「……行きます」

朝から晩まで床磨きをしていては指輪を探すところではない。とにかく早く仙郷に帰りたい。そのためにも、今より動きやすい環境が必要だとずっと考えていた。

「面倒を見てやったのに！ 恩知らずめ！」

老女は杖を床に何度も叩きつけて怒っていたが、諦めたように燐たちに背を向けて床磨きを再開した。

燐は、小声でブツクサと文句を言っている老女をチラッと見る。

「悪いことしちゃったな」

「気にするな。床磨きは他にもいるんだ。あの婆さんは話し相手が欲しかっただけだろうさ。そもそもあの婆さんは相当な変わり者でな、大昔には宮女をしていたそうだが、年季が明けた後も、何度も後宮に戻ってきて、ずーっと働いていたんだと。年寄りになってもう掃除しかできなくなっても、まだ後宮にしがみついているんだ。きつと外には居場所がないんだろうな」

「へえ」

宦官もそれなりの年齢に見えたが、そんな彼でも知らないくらい昔から、老女は後宮にいるらしい。確かに顔は皺に埋もれ、老女の年齢は見当もつかなかった。

外に居場所がないという言葉に、燐には少しだけ老女の気持ちがわかる気がした。

宦官は姜と名乗った。

彼は燐を連れて、これまで行ったことがない後宮の奥へ向かっていく。いくつもの宮殿を通り過ぎ、一際立派な宮殿の前で足を止めた。

丹で塗られた鮮やかな壁に巨大な扁額、装飾は金だ。大扉に使われた白い大理石には花が彫り込まれていて、その白さが目に眩しいくらいだった。

燐は宮殿を見上げ、ほうと息を吐く。

建物に詳しくない燐でも、その美しさくらいは理解できた。

「立派な建物だろう。神獸殿だ。近々ここで行う華妃選定の儀という式典のために宮女を集めているのさ。準備のために色々な仕事をしてもらうからな。大変だが頑張ってくれよ」

そう言われて燐は曖昧に頷く。

「——おや、姜。その娘は新しい宮女か？」

突然聞こえた声に、燐はギクリと肩を震わせた。

「これは、紫貴様ではありませんか！」

姜かじが畏おそまった声を出す。

「このお方は太子の紫貴様だ。ご挨拶を——」

姜がみなまで言う前に、燐は慌あわててその場に膝をつき、紫貴から顔が見えないように顔を伏せた。

「お、おい、燐。宮女なら平時は立礼でいいんだっ！」

姜が慌あわてて燐に囁ささく。

しかし顔を見られたくない燐は顔を伏せたままブンブンと首を横に振った。

「驚かせてしまったか。立ちなさい」

直接そう言われては燐も立たないわけにはいかない。

渋々立ち上がると、紫貴は思いの外、燐の近くに立って彼女を見下ろしていた。

近くで見ると、顔立ちが整いすぎていて怖いくらいだ。

ふと、かつて見た冷たい月の光を思い出した。

じっと見つめてくる切れ長の目は、燐を睨にらんでいるようにも見えて、怯ひるんでしまう。

笑みを浮かべていないせいか、酷薄こくはくそうな雰囲気を感じて背中に汗が流れた。

覚えていませんようにと祈りながら、改めて立礼をした。

「その髪の色は床磨きをしていた娘だな。名前は？」

その言葉に肩が震えそうになるのを必死に堪たえる。

やはり燐の珍しい髪の色は、紫貴に覚えられていたようだ。

猥じょう操さうの力を使った時、布を被かつていてよかったと心底思う。

「り、燐と申します」

声を聞いて、燐が馬を操った時のことを思い出されたらという焦りから、つい声が掠さられてしまった。しかし燐の声を聞いても紫貴の顔色は変わらない。

「ふむ、燐か」

「——あれ、気付かれてない？」

あの時とは目の色が違うし、まさかこんなところにいるとは、思ってもいないのかもしれない。

内心でホッと息を吐いた。

「人手が足りないため忙しい思いをさせるが、どうか頼む。姜も、宮女を集めてくれて感謝する」

燐は紫貴の言葉に目を瞬またかした。あまり皇子らしくない言葉だ。

腰が低いのも違う。凛りんとしているのに、どこか柔らかい。

老女から聞いていた、腹を立てて床磨きを蹴飛ばしたという皇子の印象と、まった